特集:『鳴海英吉全詩集』刊行を祝う会

日時〉二〇〇三年四月五日(土)

〈場所〉山崎パン厚生年金会館

〈主催〉鳴海英吉全詩集刊行会 (「鮫」芳賀章内・「炎樹」佐藤文夫・「光芒」大掛史子・「COAL SACK」鈴木比佐雄)

〈プログラム〉

司会…芳賀章内・佐野千穂子

鳴海英吉プロフィール紹介…玉川侑香

鳴海英吉「ナホトカ集結地にて」朗読(本人朗読テープより)

◎第一部 記念講演

講師:宗左近
演題:《鳴海英吉における「国の記憶」》 >>>

◎第二部 詩の朗読「五月に死んだ ふさ子のために」他

朗読者:末原正彦・武力也 >>>

◎第三部 シンポジウム「鳴海英吉の詩をどう読むか」

コーディネーター:鈴木比佐雄
パネリスト:浜田知章・本多寿・遠山信男・石村柳三・岸本マチ子 >>>

(敬称略)

特集:『鳴海英吉全詩集』刊行を祝う会

◎第一部　記念講演

講師:宗左近
演題:鳴海英吉における「国の記憶」

司会(芳賀章内)　それではこれから『鳴海英吉全詩集』刊行を祝う会を始めさせていただきます。今日はほんとうに、雨の中をこんなにたくさんお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。きっと泉下の鳴海さんも少し面はゆい目で、少し照れて、ニコニコ笑っているのではないかと僕は推察しました。とにかく鳴海さんの作品と心意気といいますか、そういうものが今いちばん必要な時期ではないかと私は思っております。そして、この全詩集を作りました四者、「炎樹」の佐藤文夫さんとその周辺の方々、斉藤正敏さんの主宰する「光芒」の大掛史子さんとその周辺の方々、そしていちばん事務局として、また生前の鳴海さんから死後の整理を託されていたといわれる「COAL SACK」の鈴木比佐雄さんという中心の方がおられて、そして私は「鮫」の芳賀章内と申しますが、私は埼玉におりますので気持ちの上でご協力をいたしましたが、しかし外から眺めていたためにかえって皆さんの熱い志というものが非常に伝わってまいりまして、僕はそういう意味で呼び出し太郎を務めさせていただいて、自分たちの会を主催しながら少しは変だとは思いますが、この三誌の方々の熱い想いというものを、僕はほんとうに皆さんにお伝えしたいと思ったわけです。それが、気持ちだけご協力をいたしておりました私のささやかなお礼の気持ちということもあります。

とにかく本を作ることから今日に至るまで鈴木比佐雄さんは、お亡くなりになりました鳴海さんの意を体して、幾度も鳴海さんの書斎を訪れ資料を漁りました。そして資料を整理し、そして私共が長い間お付き合いしても分からなかったいろいろな資料を発掘されました。ほんとうに今までになかった鳴海さんの横顔が出てくるような形で資料を整理されました。これは素晴らしいことでした。そしてまた「炎樹」の佐藤さんは、詩人会議のお付き合いもあり、また近くであるということもあってその志相通じ、非常に深い愛情と眼をもってこの作品の整理やその構成に豊かなご意見をくださっておりました。それから大掛さんは、細かいところまで非常に気を遣い、奥様のお慰めから女性にしか分からない部分をきわめて的確に把握し、そして皆一致団結してここまで運んできました。僕は遠い所からそれを見ておりまして、こんなに素晴らしい一致団結して作り上げた詩集というのは極めて珍しいと思いまして、主催者ですがその話をしておきたかったから私がこれを買って出ました。そしてこの本は、一生懸命になった皆さんと同じように奥様も、一生懸命これを支えてくださいまして、何度かの会合でも、何度行っても、資料を本当に気持ちよく出してくださいました。それは逆に言えば、そのことによって、生前の鳴海英吉さんよりももっと深くこの社会に資料を残すことができたのだと私は思っております。

今日は御礼を兼ねまして皆さまと共にその喜びを分かち合い、なおかつ新しい鳴海英吉像を作っていただく機会だろうと思いまして、このようにお集まりいただいた皆さまに心から感謝いたしております。主催者であります人とこの本を編集の段階から装丁、その全体の構成に対するご意見まで、心からのご意見を出してご協力くださいました本多企画の本多寿さんも見えております。詩人ですか

ら当然だと言えば当然ですが、この素晴らしい品格のあふれた装丁をもった詩集は、こうしてできたわけであります。ほんとうに皆さまの、そしてこんなにまたその結果がこんなに多くの人に読んでいただき、そしてこんなに多くの人が参加してくださったということ。これで僕はまだ日本の詩誌は充分にやって行けるものだ確信しております。

これからたくさんのプログラムがございまして、宗先生の素晴らしいお話、また新たに構成から何から一生懸命やりました皆さまを中心にシンポジウムもあり、多方面から鳴海英吉の詩を見ることができます。そして何か新しいものをここから汲んで持っていただければ、本日の会を行ったということの意義は充分にあると思います。ほんとうにありがとうございます。最後に、この私が涙が出るほど感激したというスタッフをご紹介し、私のご挨拶は終わらせていただきます。

それでは「炎樹」の佐藤文夫さん。（拍手）それから「光芒」の大掛史子さん。（拍手）そして、これこそほんとうに編集をやってしまった「COAL SACK」の鈴木比佐雄さん。（拍手）それからこの素晴らしい詩集を具体的に作り上げた功労者であります本多企画の本多寿さん。（拍手）

以上であります。これから三時間充分に、現代詩とは何か、そして今どのように鳴海英吉は皆さんの心の中で活躍するか、順にやっていただきます。これを進行するのが佐野千穂子さんです。よろしくお願いいたします。（拍手）これで私の役目は終わりまして、このマイクを佐野さんにお渡しいたします。（拍手）

【プロフィール紹介】

司会（佐野千穂子） ただ今ご紹介いただきました、司会の進行を務めさせていただきます佐野と申します。それでは早速ではございますが、最初に玉川侑香さんに鳴海さんのプロフィールを語っていただきたいと思います。玉川侑香さんは詩人会議に属し、「文芸・日女道」に属していらっしゃいます。詩誌は『プラタナス』を主宰していらっしゃいます。また阪神大震災の語り部として、自作詩の朗読をいつもあちらでやっていらっしゃるようでございます。では玉川さん、よろしくお願いいたします。

玉川侑香　皆さんこんにちは。神戸から来ました玉川侑香と申します。鳴海英吉さんの紹介といいましても、非常に私的な視点からのご紹介ということでお許しいただきたいと思います。

鳴海さんとは、詩人会議の二十周年記念のパーティーで最初にお会いしました。もう今から二十数年前になるのかと思います。鳴海さんの晩年、私にとってどういう方だったかなと思うと、正直言いまして「かなわン方」だったのですね。関西で「かなわん！」と言いますと、もう絶対の拒否。もう困る、困るという「かなわん」ですね。「あぁ、かなわンなぁー」と言うと、もう八割九割方の譲歩なのです。あるいは百パーセント受け入れて「あぁ、かなわンなぁー」という…。私にとって鳴海英吉さんというのは、晩年そういう存在でした。と言いますのは、まず「かなわン」の第一番目は電話です…長いのです。それも、私は店をしていますから食事の用意がいつも遅い。鳴海さんはもうちゃんとごはんを食べて一杯飲んでいるのだと思うのですが、その頃かかって来るのです。私がちょうどごはんの支度にとても忙しく思う、茶瓶は吹くは、お鍋は焦げるは、という頃に電話がかかって来るのです。

「誰だか分かる？」「分かりますよ、鳴海さんでしょう？」「違うよ」…というところから始まって、およそ一時間なのです。だから「すみません、今ちょっとお鍋が焦げるんです」「ああ、じゃあガスの火を止めてきたら」「はい、ちょっと一度切ります」

そしたら、またほんとに五分後くらいにかかってくるのです「お鍋切った？」って…。だからもうほんとうにその時には、娘に「コレをあっちへやって。コレをあっちへやってね」というふうに手で指図をしながら鳴海さんと電話でしゃべる。それともう一つは、やはりお酒ですね。神戸、姫路に来られた時にお酒が入ります。いろいろ仲間と口論になります。鳴海節でさんざんぶち上げて、会の皆が帰ってしまうという「ほんとにあぁ、かなわンなぁー」という場面が幾つかありました。

でも、ほんとうはこういう無礼を申し上げてはいけないのです。私はもし鳴海英吉さんに出会わなかったら、今自分が自分の表現として詩を書くということをきっとして来なかったと思うのです。鳴海さんに出会い、そのあと鳴海さんから電話をいただいたのが最初です。「詩を書いているんだって？じゃあ送って来いよ」と言われたので、書いているものを送りました。すぐに折り返し電話があって「う

ん、アレ全部ダメ」「ああ、そうですか」。それと一緒に『ナホトカ集結地にて』という詩集が送ってこられました。それを読んで、私はものすごく感動しました。人の生き死にをこれほどまでリアルに、そしてほんとうに失い続けている喪失感を持ち続けてなおかつ書くという、
それに私の魂を揺すられてしまいまして、その返事を書きましたら、また折り返しお電話をくださいました。「アンタ本気で詩を書く気ある？」「はい、あります」と思わず言ってしまったのが運の尽きなのですね。それから「じゃあ書けたもの送ってこい。でも、俺がダメというものは絶対ダメなんだぞ。だから人前に出すな」と言われました。だからせっせと送ったのですが、皆だめでした。ある日、これは大丈夫かなと思った詩に赤の朱で「ここを直せ」「あそこを直せ」というような言葉を入れて返ってきました。何かそれがすごく腹が立ちましてね、それで手紙を書いたのです。《酔っぱらって人の作品に朱を入れないでください》って…すごいことを言いました。そしたら、もうすぐに電話がかかってきました。「馬鹿野郎！　俺はな、酔っぱらっても詩を書く時は正座してンだ！」「そんなモン見えません！」と言って電話で大喧嘩をしました。そういう大喧嘩が幾度かあって、それから私は最後に、鳴海英吉の吉を取りまして「吉やンさいなら」という詩を書いたのです。それを鳴海さんに送りました。「ウン、これでいい」…最後はそれだけでした。そのあとは、何か気楽なお付き合いをさせていただいたように思います。ただ、最後だけはそんなふうな電話のやり取りが長かったので、本当にご病気だということをもうギリギリまで知ることができなくて、最後はお別れに立ち会うこともできなく、それがずいぶん心残りでした。

　何かいろいろこういううわさ話をしますと、また長い電話がかかってきそうです。ほんまに、かなわンなぁ…終わります。（拍手）

司会　どうもありがとうございました。鳴海さんの横顔というのでしょうか、たいへん生き生きと伝わってまいりました。もれ賜るところによりますと、侑香さんはたいへん「侑香」「侑香」と言って鳴海さんに可愛がられたそうでございまして、何よりだったと思いました。しかし、詩のやり取りということがそれほどに真剣だったということもお話の中で伺うことができまして、「やっぱり鳴海さんだな」と、今お聴きして思ったところでございます。たいへんありがとうございました。

【本人朗読テープ】

司会　それでは、鳴海さんのテープを聴いていただきます。

……（以下、鳴海氏本人による朗読テープ・略）……（『鳴海英吉詩集』～戦争についての覚え書き～再び銃を取らないためにこの詩集をあなたに捧げる。『ナホトカ集結地にて』「虹」「さよなら」ただし現存の詩とは一部異なる）

司会　私は間近で鳴海さんの声を聴いていて、いつもいつも非常に力強い朗読をなさっていらっしゃいましたので、何かそばに、「ああ、鳴海さん…」と胸の中でつぶやいていました。今日は鳴海さんがあそこで皆さんをご覧になっていらっしゃいますが、私などはまだ鳴海さんがほんとうに亡くなられた気がしないのです。しかしながら今こうして戦争が始まり、「あ、この戦争は鳴海さんがご存じないのだな」と思うと、やはり亡くなられたのかなという感慨をもってここへまいった次第でございます。

それでは、今度は宗先生にお話をお伺いしたいと思います。皆さんも先生はよくご存じで、今さらもう先生のご紹介は申すまでもございませんが、先生の『炎える母』という詩は、未だに炎えているような強い想いをもって私などには胸の中で忘れ難くあります。それに先生は『宗左近詩集』『続・宗左近詩集』をはじめ百冊もの著書や詩集がございます。また今は縄文塾をお開きになって、大勢の方が先生のお話を伺っているということもお聞きしております。今日私が鳴海さんの写真を持って会場に入りましたら、「いやぁ佐野さん、今日は宗先生がいらっしゃるって、俺どうしたらいいんだろうね？」などとおっしゃったものですから「いいえ、鳴海さんは今日は宗先生のお背中を見ていらっしゃればよろしいのではないですか？」と言ったら、「じゃあそうしようか。だけど畏れ多いな、俺どうしようかなぁ」などという声が私には聞こえたような気がしております。では先生、ひとつよろしくお願いいたします。

【第一部　記念講演】

講師：宗左近氏

テーマ：《鳴海英吉における「国の記憶」》

宗左近と申します。これから一時間少しばかり話をさせていただきます。

一九七九年十月より、市川市江戸川べりのマンション住まいをしております。その頃千葉県詩人クラブとかいう団体がありまして、僕は市川市に越してから三年目くらいに「話においでよ」ということでまいりました。当時の会長は、僕も少しその作品を読んでいる岩手県出身の荒川法勝さんで、そこで千葉市に行って話をしました。済んで懇親会、酒の席。ほとんどは初対面の詩人の方ばかりです。中で一人、鳴海英吉さん、この人だけが、生まれて初めて会うのに何だか懐かしい人でした。抑留されたシベリアから帰っての作品の幾つかを読んでおりました僕は、「いい男だな」と感じました。だからそこの酒の席で立ち上がって、肩組んで踊りのようなものを踊りました。それだけの間柄です。でも、鈴木比佐雄さんのお話を受けて、この壇に上って語らせていただくことになりました。多分僕の語りには偏向があります。それは後のシンポジウムの皆さんが正したり補ったりしてくださることになっております。

鳴海英吉さんは、大正十二年（一九二三）三月生まれ。ご自分の書かれた文章の中に次のようにあります。《九月には関東大震災。出足から良くありません。「今まだ生きてるの？」と言われても仕方がありません》

僕は大正八年五月生まれ、四つ年長。「まだまだ生きてんの？　厚かましすぎるよ」と言われても仕方がありません。でもお陰で、改めてこの詩人に再び出会うことができたのです。本多企画刊行『鳴海英吉全詩集』、これは実に行き届いて丁寧なモニュメントです。関係の皆さんの情熱と愛とに感嘆の想いを深くします。今日なかなかありえない美しい仕事です。

今日は僕は、鳴海さんの最も重要な仕事だと思う詩集『定本　ナホトカ集結地にて』（一九八〇年・青磁社刊）についてだけお話をします。まず『全詩集』八十七ページの「夏」を読みます。

死んでいたら　顔が　かゆくなった
どうすることも　出来ないままでいたら
おれの眉のあたりから　蛆が落ちてきた
おれは　ごろり　とおれの顔を　ころげる
蛆のころげるのを聞いた

ふっと　赤い　くれる落日
おれの死んだ瞳をつらぬいてうち
死ぬときの直前のように　きらめいてひかる
重傷兵を　タコツボの真上から
ソ連兵が射殺している
戦場の掃除で　生きる者と死んだ者と区分する
蛆　落ちるおれの顔に　熱くころげ
おれは米粒に似た　蛆を食う
いつの間にか　頭上に銃口があって
ふっと銃口に夏の花を見た

…異様な作品ですね。いきなりの第一行が「死んでいたら　顔が　かゆくなった」です。なぜかゆくなったのか？　蛆がいたのですね。なるほど、生きた体なら蛆は這わないだろうけれど、死体からは蛆がわくのですか？　生きていることが死んでいること、死んでいることが生きていること—それがシベリア抑留ということなのでしょうか？　しかもこの作品、何とも言えないユーモアがあります。全てのこの詩集の作品には、これに等しいようなユーモアがあって、貫いています。

次に「北」というタイトルの詩を読みます。

おれは北という方向を知らない
この青くすきとおる　凍った根雪
おれの往生を動かしつづけるものの中に
おれは立っている
おれの肩をすべりおちる　雪の方向が北だ

ここでは法の決裁はない
おれたちを徒刑にする
雪の上に銃尻で打ちつづける
奇妙に歪んだ　白い平面の雪
まくら木のように　点々として倒れ
どうにか頭だけが北に向って
なぐられながら　ねじまがるものを
黒い雪鴉が黙ってみていた

シベリヤの森林は権威が支え合っている
巨大に立ち枯れた木々の上に　雪鴉
おれたちを裁くことができる
ほほかぶりした　痩せたおれを
一撃で殺すことができる
うす暗い森林の向うでも
雪だけは　すけて見え
あの仄白い常闇のなかで
ぼんやりとした　形のないものが
ふるふると凍りながらやってくる
殺される

おれを殺すことができるか　裁けるのか
スターリンか
天皇か
あみだ仏　おれのなかのおれが
北に向って合掌すると
常闇のなかから　白く雪がふりこみ
北の方向から
烈しく凍氷しはじめてくる
おれは初めて　手と足がくぴれ
二本の手と　二本の足が　白くなる

シベリアでは、自然を超えた権威が働きあっている…と訴えたいのでしょうか？　その権威が「スターリン」か「天皇」か。だがどこか余裕があって、この作品にはユーモアがありますね。何か達観のような、願望のようなものに『ナホトカ集結地にて』の作品の世界は支配されていますね。そのことからユーモアが生まれてくるのではないでしょうか。
次にもう一つ、九十一ページの「棺」を読みます。

おふくろ　おヤジ　よ
おふくろ　おヤジ　よ
おふくろ　おヤジ
さよなら

さよなら
大八車につまれる　丸太ン棒のおれ
凍って仄白く凍った　おれ
凍土で深く掘れない
一つの墓穴
何人もの死体が鉄棒でこじられる
墓穴のなかにころげ落ちる
折れる背骨　頭の毛　ちんぽこ
びしびし折れて　ごろりとつまれる

丸太ン棒　丸太ン棒
丸太ン棒だと思ってくれればいい
鉄棒でこじり　墓穴にごろりと落ちる

その他の目のあるもの
おれらは涙を流したりしない
増食券を目当てにした　夜間作業
あいつら　死ねば　おれのハラふくれる

投げすてられ　埋められる凍土のなかに
おれが埋めつくされるか
凍土の切れはし　墓穴の外に燃える焚火
きらめいて　おれの墓のなかに落ち
この夜のなかを毎日　燃える火は何本立ち
夜も昼も　掘りつづけているおれ
げっそりと痩せ切ってしまった

おふくろ　おヤジ　よ
おれは　いま棺のなかで
狂いたくなるように　死んでいるのだ
おふくろ　おヤジ　よ
おれに眠れと言うな

語りかけの音楽ですね。自分の客観化、自分の戯画化、ユーモア化。それが自分の死者化—自分が死者になるということ—それを客観化する。それから戯画化する。ユーモア化することによって行う。これがこの詩人の歌の基本ですね。そして語りかけている相手は、友人たちだけではなくて、両親ということが特色です。多少の甘ったれがあって、それが作者と読者を救っているということにもなります。…苦い甘ったるさ。

次は「零（ぜろ）」という作品を読みます。

ぜろが立ち上ってくる
なにもない痩せ細ったままの姿で
おれのなかに　起きあがってくる
すれちがう　ゆらめいていた
そこで終ったのだ
昏いシベリヤの地平線で　うめきなだれ
どよめいてよどみ　雲のはてで濁ってくる
おまえたちの挽歌を語らなくていい
ほとけさまになる
手と足を曲げ　凍ってしまう
火葬しないから　凍ったまま埋葬する
なにもない
ないものを　おれは歌えないでいいのか
シベリヤで　にんげん　が死んだのである
静かに立ちあがってくるが
その死にざまに　ためられているもの
おれは　痩せて風にふかれていた

これは実に痛切な一篇ですね。零が「おれの前に」でなくて「おれのなかに」、零なのに、無いのに、ある存在となって寝ていたものそれが起きあがってくる、零が起きあがってくるという作品です。この「零」は、「すれちがう　ゆらめいていた／そこで終ったのだ」と、起きあがってくるだけでそこで終わったのだというわけ。起きあがってくるだけでそこで終わった零。これは、しかもその「零」と「おれ」という、ふたつがひとつ、ひとつがふたつの双方に引導を渡しているつもりなのです。つまり「もうおまえたちの挽歌を語らなくていい」と「おまえたち」に言っているわけです。世の中にはそういう作品も少ないのではないでしょうか。

そこで「おまえたち」、そういう「零」のようなものたちは仏様になる。ものを言わず、観念して諦めて、しかも諦めるからこそにこやかに微笑んで、誰にも恨み言を言わない仏様になる…そういうわけですね。でもその仏様とは、「手と足を曲げ」そのまま「凍ってしまう」そういう仏様。凍ったままの人間のこと。それをそのまま、今度は「私は埋葬する」のですね。それはもはや、単に「ないもの」であるに

すぎなくなる。それを作者はどうするか？　どうもしない。「ないものを　おれは歌えないでいいのか」と言うのです。それがシベリヤで死んだ人間の前に居た「おれ」なのです。そしてその死者は静かに立ち上がってくる。だが、それを前にして「おれは　痩せて風にふかれていた」と作者は書くのです。

　この作者の体験に、僕は自分の体験をつけ加えます。一九四五年八月十五日、僕の親しい友達四名と僕の母は、もはやどこからも帰って来ませんでした。「おれは　痩せて風にふかれていた」と英吉さんは書いています。…僕もまた、同じでありました。

　次、もう一つ「神」という作品を読みます。

あなたは殺されるべきであった
または死ぬべきであった
シベリヤの原野のなかで
うづくまるような型のままくずれると
おれの眼のなかで
ひっきりなしに雪が交差してふりこみ
白い合掌のかたちになる
（おれは　あなたに棄てられたと思わない）
おれが眼を閉じるまえに
眼をそっと開けてみる
今日もシベリヤでは
生まれてくるものに出会えなかった
無明の修羅に　おれは合掌している
白馬に乗った　あなたが見える
玉座と言う神の座が　こっちから去る
おれが死んでゆくとき
あなたは殺されているべきであった
または死ぬべきであった

　最後の二行だけを繰り返します。

あなたは殺されているべきであった
または死ぬべきであった

　…これ、ひどすぎるとお思いになりますか？　昭和五年から昭和二十年のいわゆる十五年戦争での日本人戦死者総数、ご存じですね？　二百三十万人と言われております。多すぎます。そしてその間の中国人の戦死者総数は、一千万人と言われております。膨大な数です。日本人の戦死者の四倍です。しかしその膨大な数の中国人たちを死なせたのは、どこの誰ですか？　日本人の兵士以外の者ではありえませんでした。それより半世紀経って、森首相は言いました。「日本は天皇を中心とする神の国です」と。日本では、正気でない人が総理大臣になるのですね。

　もう一篇だけ僕の一番好きな詩「雲」を読みます。

なんとなく　所在なく浮んでいた
おいと言ってみたくなる
肩の向うで　なんだい　と答えるから
ハラへったなあーと言ってみる
そいつは笑う　おまえは死んだのである
からっぽなのである
あれはなんだいと聞く
あれはおまえさんの死んでいるところ

あれはおまえだ

おいおれ　と言ってみると

今度は返事がないから　おれは寂しかった

八月のむれる草原

夏風邪を引いたように

おれ　くしゃみが出そうになる

おい　おまえ半分しか死んでいない

おれは肩をツかれる

雲をま半分にわって　落下

野火が拡がっているが　空のからっぽ

一しゅん　雲が白く映える　赤

おれは相変らず落ちつづけている

本当はなにもないのだ

あるはずがない

おれの半分の血を流し　入道雲になる

こぶしをふり上げてみた

おれの半分だけ重いのである

　最後の三行だけをもう一回繰り返します。

おれの半分の血を流し　入道雲になる

こぶしをふり上げてみた

おれの半分だけ重いのである

この作品の初めの一行は「なんとなく　所在なく浮んでいた」…僕、強く同感します。僕、そのとおりです。僕、江戸川のほとり、左手に富士山、中央に秩父山塊、右手に日光男体山の見える関東平野を見晴るかすマンションの窓の中で、ぼんやり浮かんでいます。そして「おい」と言ってみたくなります。すると、肩の向こうで何かが笑う。「おまえは死んだのである。からっぽなのである」という声がする。そこで僕、窓の外の空を指して「あれはなんだい？」と聞く。すると、何者かが「あれはおまえさんのいつか死んで渡る所、つまりあれはおまえだ」と言う。そしてあたりに沈黙…。「雲」の書き手と僕、ずいぶん今似ているところがあると思います。

ところで作品「雲」は、僕の現実と違って次のように面白いところがあります。「おい　おまえ半分しか死んでいない」そう言われて肩をツかれて、「おれ」は「雲をま半分にわって　落下」するのですね。野火が拡がって「雲が白く映える　赤」、そして「おれは相変らず落ち続けている」。なぜって「あるはずがない／おれの半分の血を流して」—このあたりから後が、僕のすごく共感するところです。「おれの半分の血を流し　入道雲になる」というのです。そして最後が傑作。「こぶしをふり上げてみた／おれの半分だけ重いのである」—つまり、おれの生きているのは「半分だけ」だと言うのですね。これは、何か遙か昔の宇宙のそもそもが生まれ出る時の、初めの初めの宇宙創生の、あの瞬間の記憶の再生なのではないでしょうか。そうであるとともに、「私」という名の宇宙が消滅していく現在の私の半分になっている現在のその中からの記憶、つまり「過去と未来の双方の同時記憶の再生」にほかなりません。なんだか妙なことを言い始めているようですが、しばらくお聞きください。いくぶん英吉さんを離れます。

ノーベル賞を十年くらい前に受けたメキシコの詩人オクタビオ・パスは《詩は国の記憶である》と言いました。「国」というのは「ふるさと」と訳した方が良いかも知れない。これは僕の言葉に直せば、《詩は、宇宙の創生と消滅との、そしてそもそもの生命の誕生と死亡との、その双方の同時記憶の喚起のことである》と。それをもう少し別のことからお話をいたします。

人間の生きている世界には、大きく分けて次の二つの価値があります。一つは「使用価値」。使用価値というのは、例えば使用価値を持った存在を挙げますと、自転車。これはA地点からB地点までの運搬が値打ちです。つまり、専ら自転車は肉体に仕える肉体のための道具です。繰り返しますが「使用価値」、これが文明の道具の意味です。そして繰り返しますが、文明は使用価値だけの構築物。もう一つは「存在価値」を持つ存在というものがあります。例えば夕焼け。それが地球のこの世に在るだけで精神に幸福を与える力を持っております。うれしさを与える力を持っております。例えばもうだいぶ古い話になりましたが、マニラの夕焼け。これは三十年くらい前に世界一だというので旅行会社が盛んに案内し、皆さんずいぶん夕焼けを見にいらっしゃっていたらしい。そのマニラの夕焼けは、言うまでもなく宇宙の中心の力、神様の力が招く美しさですね。それが存在価値です。だから宇宙には、自転車のような「使用価値」とマニラの夕焼けのような「存在価値」の二つがあるということ、その二つの中で生きていくのが人間であるということ。

少し話を横にずらします。

圧搾機にかけて、使用価値である自転車をペシャンコにします。無残ですね。残酷です。それを、五十年くらい前の草月流勅使河原蒼風の前衛派一派が生け花展に出しました。ご覧になっている方

は多分もういらっしゃらないでしょう。僕はそれを見て、強い衝撃を受けました。現代文明社会の底に押し潰された人間像、破壊された存在価値がありありとそこに具現していました。では、否定形によって押し潰された自転車のような否定形によってしか存在価値は人間の眼には見えなくなったのか？—そのとおりですね。そしてそれは使用価値を作る力、つまり文明の強度の発達によってそうなったのです。しかし、文明の強度な発達は何によって測ることができるか？ 「戦争の武器」という名の使用価値の働きの結果、つまり戦死者の数によって測ることができるのではないでしょうか。

去年の朝日新聞に出ていたのですが、アメリカのある統計によりますと、地球上の戦死者の統計は十九世紀は二千数百万人でした。ところが二十世紀は戦死者総数一億七千五百万人。この百年間で戦死者は一億五千万人増えたのです。それが使用価値のたいへんな威力のある武器によって急増したことを示しております。それはどういう結果をもたらしたか？ 地球に生きていく上での何よりも大切な真の幸福、夕焼けのようなもの、存在価値を押し殺してしまったのです。つまり、見えなくさせてしまったのです。

ここで超現主義運動の推進者アンドレ・ブルトンの一九二三年の著作「超現実主義宣言」、これは岩波文庫版で『超現実主義宣言・溶ける魚』という題で出ておりますので、簡単に手に入れることができます。その一番最後に何という一行が書かれてあるか—《生はここではない所にあるのです》。この「生」とは、英語の「 life」と訳すべきですね。しかもほんとうの生命の営みは、それは無いのだと言うのです。悲痛ですね…。その言葉どおりだとすれば、この宣言以来満八十年間、僕たちはそのlife、生命の無いここに地球に生きて来なければならなかったことになります。そして最も厳しいその代表が、シベリアにおける、シベリアから帰った鳴海英吉さんなのではないかというのが僕の意見です。「おれの生きているのは半分だけ」というのは、何の誇張でもない現実そのものの言葉、報告だったのではないでしょうか。

そのブルトンが《生はここではない所にあるのではない》といった、ほとんどその頃にパブロ・ピカソが言いました。

《……絵画はもはや客間の装飾ではない。いまや世界認識変革の武器なのだ》そう言っているのです。「絵画は感覚の心地よさを求めるための道具、快感の使用価値をもはや持つものではない」というのがこの人の意見なのです。つまり、夕焼けと同じように「宇宙というものの究極の存在価値を伝えるための武器となったのだ」と言いたいわけです。ならざるを得ないのだと言ったわけです。この物質文明の使用価値の暴力に対抗していくためには、そしてそれに曲がりなりにも闘い合うためには、「絵画の生命が新しく道を求めなければいけないはずだ」と言っているわけですね。一九二三年にピカソとブルトンが言ったその二十世紀のふたりは、いち早くやって来る世界の危機を先取りして感じていたのではないかと思われます。その二十世紀というのは何であるかというと一九〇〇年、二十世紀の幕開けに、ニーチェは《神は死んだ》と叫びました。このうめきをもたらしたものは何かというと、十九世紀に発展した科学と、それの生んだ唯物論です。マリアは男性に触れることなしに赤ん坊イエスを産んだ—これは生物学に背くこと。嘘。イエスは裸足で湖を渡った—これは物理学に背くこと。よって全てバイブルは嘘の缶詰、嘘の作り話の集約。つまり神は存在しない。こういう唯物論的宇宙論に全世界の多数の人々がうなずきました。「そうだ」「そうだ」と。…日本人の大勢も。

しかし「そうではない、神は確かに存在する」と、その仕事そのものによって証明しようとした人々が居ました。十九世紀に新しい芸術運動を始めたモネ、シスレー以下の印象派の画家たちです。十九世紀の聖書批判を「間違っている」と彼らは美術の実践によって主張したのです。なぜなら聖書はせいぜい二次元存在である、二次元存在にすぎない文字の群でできている。それが「神様」という時間と空間という二次元をはるかに超える真実の存在、三次元・四次元存在を文字によって表すことなぞもともと不可能である。そもそも無理である。ところが私たち芸術家は、大自然という生命の本体そのものを対象としていて、その生命の本体を生んだ力、すなわち神の力を受けてとらえるために、生きている大自然そのものの働きをカンヴァス、絵筆、絵の具という三次元存在によってとらえることを目的として仕事をするという立場である。この第一次印象派ののちに続く後期印象派、例えばセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンたちも皆同じです。あの主知的な人間だと思われていたセザンヌさえ「神なくしては私は絵が描けません」と言っております。そしてこのセザンヌを通して激しく神を求めることを覚

えたのが、リルケでした。

こういう印象派、後期印象派たちだけではなくて、二十世紀の前衛美術家たちの全てが、宇宙の根源「神」を求めることをその生きることの中心としました。一九五五年前後の最前衛アクション・ペインティングのジャクソン・ポロックは、こういうことをしました。床にカンヴァスを横たえる。その周囲に八色くらいの別々の赤・橙・黄色・紫・黒そのほかの絵の具を入れたバケツを置く。そこにほうきのような大きな筆を浸けてたっぷり絵の具を吸わせたのちに、それを持ってカンヴァスの上を走り回る。黒が済んだら紫へ、それから赤、黄色などなどの絵の具を滴らせて、カンヴァスの上を走り回ります。何を描こうとするのか？　カンヴァスの向こうに対象、モデルは一つもありません。走り回ってやたらに絵の具を滴らせるだけです。画家は内心の衝動に突き動かされて、動きに動き、走りに走ります。それだけのこと。ところがその結果がどうか？　アメリカ・ニューヨークの近代美術館に行って見てください。それのできない方は、東京・毎日新聞のそばの東京近代美術館に確か一点はあるはずですから、どうぞそれを見ていただきたい。何がそこには現れ出ているのか？　ある異様な、壮烈な存在が現れ出ております。すなわち、宇宙生成のビッグ・バンの大爆発。中空に己をたたきつけて吹き出し続ける大花火。つまり神を生んだその神を生んだ、そのさらにそれを生んだ以前の以前の、以前の神。己を吹き出し止まない神。すなわち真実のそのまた真実の源、それがあたかも大自然の自画像であるかのごとくにそこに現れ出ています。

こういう仕事こそが、芸術家の仕事であると僕は思います。そしてその道を歩いた芸術家たちが、二十世紀の西欧の主だった詩人たちだと思います。二十世紀の日本の主だった詩人たちではない、主だった日本の詩人たちの中では宮澤賢治その他ごく数えるほどの人しか居ない。しかしヨーロッパの詩人には数多くが居る。その中のまず二人ばかりをご紹介します。

初めにフランスのジュール・シュペルヴィエルの「秘密の海」。九行です。

誰もが海を見ていない時
海はもはや海ではなくなっている
それは誰もが私たちを見ていない時に
私たちがなっているものと同じになる。
そこには居るのだ　別の魚が
そしてまた別の波が。
それは海にとっての海
そうして今私がここでそうしているように
海について夢みているものたちにとっての　海。

これは《国の記憶》という言葉を吐いたオクタビオ・パスの意見と全く同じなのですが、今度はそのオクタビオ・パスの八行詩を読みます。

垣間見られた生

海の夜の中の閃光
それが　魚
森の夜の中の鳥
それが　閃光
肉体の夜の中の骨
それが　閃光
世界はすべて夜
生　それが閃光

こういう作品とともにその横に並びうる作品が、日本の中にもむろん何点かあります。たまたまではなく、その多くは若いというよりも幼い子供さんたちの書かれたものなのです。その一つをご紹介します。発表された時に小学校一年生であった岩手県の藤根優子さんという人の四行作品「あさがお」。

あさがおさん
おげんきにいますか

はい
いますよ

この少女の前にあるのは、赤や青の花を咲かせているあの朝顔の花ではないのです。黒い朝顔の種子です。種子を包んでいる茶色い殻、それが見えている。その中の朝顔の種子は見えないのです。けれども、この少女には皮を通して見えるのですね。その皮の中にある朝顔の種子に向かって、

少女は「あさがおさん、おげんきにいますか」と呼びかけるのです。すると、その中から「はい、いますよ」という声が響いてくる。それがオクタビオ・パスの詩の「閃光」です。そして世間の普通の大人たちには、つまり自転車などの使用価値を持つ存在を作り出し、それを動かして現実生活を行うばかりを目的として、お金儲けの暮らしの当然の帰結としてイラク戦争を起こしたりする大人たちには、決して見えない閃光。それを見ようとして、現にしたたかに見ている芸術家たち。別名、詩人の中のまぎれもない詩人の一人が、先ほどから申し上げている鳴海英吉さんであることは疑いを容れません。しかもこの鳴海さんはひたすら謙遜していて、自分は半分だけ死んでいる、つまり「半分だけの閃光」だと下向いて言っているのです。

三月二十日にイラク戦争が始まって以来の全世界の戦争反対の人々の求めているものこそは、ほかならぬこの閃光。たとえ半分になっているにしろ、この閃光なのではないでしょうか。あの二十世紀戦死者総数一億七千五百万人の数字を上回る戦死者総数を、始まったばかりの二十一世紀は持とうとするのでしょうか？　それとも鳴海英吉さんと共に、目覚めた私たちはその数字を一人でも二人でも減らしていこうとするのでしょうか？　楽観は許されませんね。なぜなら、戦争を起こし戦争をおし進めていく集団は、いつの時代でも使用価値を生産し、それによって金銭の利益を得ようとする欲望なのですから。つまりは、文明の発達そのものが戦争を行う原因なのでしょうから。

大問題の前に私たちは立たされていますね。いったいどうすればいいのですか？　三百年前、「造化に学べ」つまり「大宇宙に学べ」と芭蕉は言いました。そして造化に学ぶことこそが俳句、つまり現代語に直せば「詩」なのです。今、まずここに居る僕たちは、目の前にある『鳴海英吉全詩集』を繙き直すことから改めて人類生死の大問題への道を学んで行くべきなのではないだろうかと思います。

ここで、『定本　ナホトカ集結地にて』の最後の一篇「さよなら」を読ませていただきます。そして僕の話の終わりということにさせていただきます。

さよならと　言えない　言わない
手をふらない　手をふれない
対岸の燃えているみどりが
おれに今　烈しく手をふっている
燃えているものは　遠いとうめいな八月
仲間たちの墓
みどりのシベリヤは球体の墓でしかない
シベリヤは　うづくまっている
だから　さよなら　と言えない
別れの挨拶はない
復員船の上甲板に呆然と立つおれを
背中から　ヒリヒリと痛く焼く八月
名前ではない　いま　誰かがいない
おれは誰かを失いつづけている
顔にふきつける風に　倒れそうに洗われ
誰かがいない　なにかを失いつづけていると
おれはもう問うのを　やめた
さよならと言うのを　やめた
手をふることも　やめた
くちゃくちゃな煙草に火をつける
火をつけた煙草を海に投げる
細い煙を上げて　灰色の船体をすべり
煙草はすーうと落ちてゆき
波に叩かれて　くだくだになってしまう
ちぎれ軍帽を眉まで下げて

黙ってくだかれる煙草を見ている
最後まで　さよなら　と言えないか
最後まで　手をふらないか
さよなら　と言わないか
どうしても　言えないか
おれは黙りきって
煙草を海に投げつづけている

終わります。（一同拍手）

―了―

司会　先生、どうもありがとうございました。皆さんのお耳に深く届かれたと思います。そしてほんとうに、挽歌を語らなくていい時代が来たらいいなと思いますし、先生のお話を伺いながら、鳴海さんがもう少し、ほんとうにあと五～六年でも存命でいらっしゃいましたらと思います。皆さんのお手許の追悼詩文集に鈴木さんの「草深（そうふけ）」という詩がございまして、その一節の中に《玄関先にはハーブや野草の花々に囲まれ／入り口には縄文土器があり、／あまたの歴史書と詩集が家中にあふれた家だ》と鳴海さんのお家を詩ってらっしゃいますが、つい一週間前にこの会の打ち合わせのためにこの会場へまいりました時に、ちょうど宗先生の縄文塾がございました。私ども今日のスタッフたちも一聴講生としてお伺いしたのですが、私はあの晩に「ああそうだ、鳴海さんがもう少し存命でいらっしゃったら、お心が少し休む時があったら、縄文土器があるあの家…」と頭に浮かびまして、宗先生ともっともっと語りの時間があったらどんなに良かっただろうと思いました。先生、今日はたいへん良いお話を伺わせていただきまして、鳴海さんも喜んでいると同時に、私どももたいへんありがたく思いました。また勉強にもなりまして、ほんとうにありがとうございました。

◎第二部

詩の朗読「五月に死んだ　ふさ子のために」他
朗読者：末原正彦・武力也

司会　末原さんは「千葉詩人クラブ」、それから「光芒」同人でもございます。つい先日も千葉のテレビにも出られましたが、NPOの活動をして理事長さんもしていらっしゃいます。末原さんは、かつては福岡放送局にもいらっしゃった方で、朗読の方もたいへんお上手でいらっしゃいますので、皆さんどうかお聞きくださいますように。それでは末原さん、よろしくお願いいたします。

末原正彦　こんにちは。ただ今ご紹介いただきました末原でございます。今日は鳴海英吉さんの「全詩集刊行を祝う会」ということで、この詩集ができたということで送っていただいて、届いたのを見た時にほんとうにびっくりしました。実に立派な詩集でございまして、お作りになった方々のご苦労というものに、ほんとうに心から敬意を表す者でございます。ありがとうございました。しかも今日は、その作品の中から朗読をするよう実行委員会の方からご命令をいただきました。『銃の来歴』の中の「実戦教育」という作品と、詩集『念仏』の中の「銭念仏」の二つをやるようにということですが、「実戦教育」というのは非常に難しくて漢字がいっぱいあるものですから、あまり読めないものですから、そのへんはちょっとご勘弁いただきまして、その隣にある「残飯」というものでよろしいかとお尋ねしたところ、まあいいでしょうということで、「残飯」と「銭念仏」を読ませていただきます。それでは先ず、「残飯」から読ませていただきます。ザンパンといえば、豚の食べるものというような印象を受けます。これをノコリメシと読むと、何か人間が冷たいごはんを食べるといった感じに変わります。言葉というのは面白いなと、ちょっと見ただけでもそういう感じを受けたりするわけです。

……「残飯」「銭念仏」の朗読……

司会　どうもありがとうございました。もちろん原作もよろしいのですけれども、末原さんの朗読もたいへん良くて、何度聞いてもいいと思いました。多分皆さんの心にも届いたものと思います。
それでは今度は、武力也さんにお願いいたします。武力也さんは、やはり「詩人会議」に属していらっしゃいまして、「千葉詩人クラブ」の会員、「グループ耕」の会員でもございます。それから作詩工房「このゆびとまれ」もしておりまして、たいへん朗読がお上手でいらっしゃいますので、どうぞ皆さんお聞きくださいますように。

……武力也さんは詩原稿を見ずに「接岸」、「五月に死んだ　ふさ子のために」の二篇を暗唱する……

司会　武力也さん、ありがとうございました。

浜田知章 （手を挙げて発言する） 朗読を聞いて、上手いと思った。しかし僕はね、「実行者」なんだ。僕は鳴海英吉君と同じ。同年兵。つまり戦中派。同じ経験をしている。二人の朗読詩は全部リア

リティがあった。やはり凄いね。二人の朗読者も上手かったけれどね、それ以上のリアリティとはいったい何かということを考えていたら、やはり鳴海君と僕は同年兵なのですよ。同じ経験をしているのですよ。同じ青春の悲劇を味わっているのです。そういう感じがしまして、ひとこと述べたくなりました。ただ、詩の問題についていえば、つまり詩は「フィクション」か「真実」かということになってくると、これは大きな問題になるのですよ。だから我々は、ドキュメンタリーとか記録とか、そういうことを言いながら「人間の真実とは何か」ということを詩の上で追求してきたのです。これは皆さんの課題でもあるのですよ。鳴海君と僕とは同じ経験をして、そこから「詩」というものを考えた人間として、ひとこと感想を述べたくなりました。（拍手）

司会　どうもありがとうございました。ほんとうに私も、今浜田先生がお話しになったお気持ちが分かります。私も今二人の朗読をお聞きしていまして、涙が出てしょうがなかったのです。そして、鳴海さんがほんとうにお二人に乗り移っているなあと思って…何ですか胸がいっぱいになってしまいました。浜田さん、ほんとうにありがとうございました。

【鳴海夫人紹介】

司会　それではここで、鳴海さんの奥様がおいでになっていらっしゃいますので、ちょっとご紹介申し上げたいのです。鳴海さんの奥様、ちょっとこちらの方へおいでくださいますか？　（拍手）

鈴木比佐雄　（鳴海夫人を紹介して）奥様のすゑさんです。（拍手）私がいつもちょうど昼過ぎぐらいに行きまして、最終電車の十一時くらいまでずっと鳴海さんと酒を呑んでいる間、つまみをなど作ってくれ世話をしてくれました。鳴海さんはたくさんの詩誌に参加されていたのですが、そういうことを全て認めてくださった、素晴らしい奥様です。（夫人に）ちょっとひとこと何か…。

鳴海夫人　どうも皆さん、今日はありがとうございました。私は詩のことは全然分からないので…。ほんとうにありがとうございました。（拍手）

司会　ただ今、鳴海さんの奥様を皆さまにご紹介いたしました。私も初めてお目にかかったわけでございます。今日は八十人くらいいらっしゃったらいいかなと思いましたら、もう百名近い九十七名という参加者がありました。ほんとうにたいへんありがたいと思いました。

◎第三部

シンポジウム「鳴海英吉の詩をどう読むか」
コーディネーター：鈴木比佐雄
パネリスト：浜田知章・本多寿・遠山信男・石村柳三・岸本マチ子

鈴木比佐雄　これからシンポジウムを始めさせていただきます。司会をします編集委員の一人の鈴木比佐雄と申します。いちおう編集の経緯を含めて私が鳴海さんについて少し話させていただきます。私は年譜とか解説も書きましたしいろいろ雑誌にも発表しているので、私の話よりも今日のシンポジウムの方々にいろいろ語っていただきたいと思っていますので、よろしくお願いします。本格的なシンポジウムということよりも、鳴海さんというのはすごく多面的な詩人だったもので、いろいろな角度から論じてもらえる詩人なので、一つの方向性に持っていくのではなく、鳴海さんの詩と人物の両方の魅力を語っていただくようなシンポジウムにしたいと思っております。

私が鳴海さんと知り合ったのは、一九八七年の春か夏あたりだったと思うのですが、私は『詩的現代』という雑誌をやっていまして、それを終刊した時に鳴海さんからハガキが来たのです。それから私信のやり取りをして、そして「光芒」の集まりに来ないかということで、初めて会ったわけです。自分がこれから個人誌「COAL SACK」というのを始めるということでいろんな話をしました。その後も私信のやり取りとかいろいろ見ていまして、この詩人は私のことをとてもよく見てくれているような気がして、創刊号の寄稿者の一人になってもらいました。それから亡くなる二〇〇〇年の初めの頃まで、三十七号くらいまでずっと欠かさずに寄稿を続けてくれました。私も八七年以降よく遊びに行きまして、昼ぐらいから押しかけて行って、早く帰ろうと思うのですがいつも最終電車になってしまうくらい何だか詩の話が尽きなくて、ずっとそういうようなお付き合いをさせていただいたのです。

私がなぜ鳴海さんに関心を持ったかというと、隣におられる浜田さんも戦後間もない頃の「列島」の同人なのですが、私は「列島」の詩人に関心を持っていたのです。「詩的現代」というのも、黒田喜夫という方が参加していたもので「列島」の詩人だったのです。黒田喜夫と鳴海さんは、「列島」四号の新人特集で一緒に紹介されています。そういうことで「列島」の詩人、その頃は本名の加川治良という名前で書いておりました。私は戦後詩の歴史に関心があって、自分でも批評文を書こうと思い、「荒地」を含めていろいろ「列島」のことなども調べていたのですが、鳴海さんには「列島」の詩人ということが先ず念頭にありました。それと同時に、最後の方の「荒地」にも関わったシベリヤ帰りの石原吉郎という詩人も、私は好きだったのです。石原吉郎のことを調べていくうちに、内村剛介さんが石原吉郎と鳴海さんを比較した評論を書いていたもので、それを読んで心に残っていたのです。いつか機会があれば鳴海さんの詩を読みたいと思っていた。その詩人と一九八七年に知り合って、意気投合しました。その後、私の創刊した「COAL　SACK」の中心的な役割をずっと果たしてくれていました。浜田さんにも「COAL　SACK」を送って、その宣伝をしてくれたということで、「COAL SACK」を創り上げていくために、私とは同志のような関係だったのです。

それっと同時に、私は鳴海さんから多くのことを教えられました。それはなぜかというと、「反復」と

いうか一つのテーマを熟成させて何度も何度も書いていく姿勢とか、それからすごく志が高かったのです。自分の詩以外に、「今、現役の詩人で誰が優れた詩を書いている」とか「誰がこういう詩論を書いて詩壇を引っぱっている」とか、詩壇というものがあるかどうか分かりませんが、詩壇全体というか、詩を志す人間の中で一番頑張っている人間のことに対して目配りをしているというか、そういうような志の高さを持っていたと思うのです。それは戦後間もない頃、「荒地」とか「列島」を生み出す起爆剤的な役割をした福田律郎という詩人がいましたが、その詩人から多くを学んだのではないかと思うのです。そういうこともあって、私は鳴海さんを見ていて、私の父と同じ年なのですが、私の父の世代の最良の人物だと確信しまして、そういうことでずっとお付き合いさせてもらって、幸せな時間を過ごさせてもらったということなのです。九四～九五年頃に、私はもう鳴海さんの価値が分かって「鳴海論を書きたい」と言ったところ、「俺のことはどうでもいい」と言われましてね、じゃあ、もう死んだ時しか無理なんだな…というような想いがあったのです。でも、こんなに早く亡くなるとは思いませんでした。倒れた時もちょっと言葉が不自由になって、ほんとうに聞きたいことがたくさんあったけど、聞けなかったということもあって…。倒れてからはじめて会ったのが二〇〇〇年の五月七日なのですが、電話にももう出られなくなって、ちょっと押しかけて行きました。解説にも少し書きましたが「俺が万一の時は頼む」ということとか、あとは鳴海さんの潔さというのでしょうか、「これを全部お前にやる」と言ってくださって、もう棄てるという感じですね。鳴海さんの好きな一遍の「捨離」というか、それを生で聞いたような気がします。でも、「これを頼む」というのは、私は「全詩集を作ること」だというふうに理解したのです。あと、「他の詩人には知らせなくていい」ということまで言ったのです。でもひと月経って私は、もうそういうわけにはいかないと思い、いちおう仲の良い詩人に伝えたのです。そういうこともあって、多少使命感がありまして、何とか三年後の今日こういうような会を持てたということは、鳴海さんがこういう時間を作ってくれたのだと思って、ありがたいと感謝しております。皆さまにもほんとうに感謝しております。

私の話はこんなところで、あとはほかの方に語っていただこうと思います。先ず初めに浜田知章さんです。浜田さんは「列島」時代の昔からの仲間で、鳴海さんが浜田さんを紹介してくれたというのは、多分私と浜田さんが近いところがあると考えたんじゃないかと思いますと思います。それはどういうことかというと、私と同じように個人誌「山河」というのを戦後間もない頃にやられた。それは大阪では一大星雲となった雑誌です。あと、岡本彌太という高知の詩人を、生涯の師として今でも論じ続けているということもありまして、そういう自分と詩人との根源的な出会いの関係を大切にされてきた方です。

浜田知章 『全詩集』が最初に出た時に、私は見たのですよ。その時、加川治良のお父さんが活動の弁士だったということに私はびっくりしたのです。皆さんは若いから、活動なんか見たことないでしょう。いわゆる無声映画です。トーキーになってからは皆さんご存じでしょう。ところが僕らは、九歳か十歳の頃から無声映画を見ることに日夜明け暮れて、学校の勉強なんかどうでもいいのですよ。その無声映画が、我々に夢とフィクション（虚構）と、それから「人生とは何か」という現実認識の仕方を教えてくれたのです。だから我々の少年時代は、無声映画によって文学界、映画に対する眼が開けていきました。昔は『何が彼女をそうさせたか』とか藤森成吉の原作を学校に巡覧していたのです。それを小学校へ見に行ったことがある。そしてショックを受けた。そこから文学への道が開けた。そういう鳴海君のお父さんが活動弁士という…。私も大阪へ出てから、大阪の東区に日の出通りという通りがありました。そこに映画館が五、六軒ありました。私も活動弁士のファンでしてね、玉造座という所の弁士は戸田桂州というちょっと美声で、何とも言えない詩とか、僕は毎日聞き惚れてました。つまり浪花節語りではなくて、その美声といったら「活動弁士はかなわンな」というふうな気持ちを受けました。「かなわンわぁ」というのは、もうほんとうに大阪弁の特徴的なことばですが、「かなわン！」というような気持ちだった。だから僕も、第一次は活動写真時代。それから文学に開眼するのは、そういうところから十七、十八歳の頃萩原朔太郎にふれたり、ポール・ヴァレリーにふれたり、そしてだんだん文学の世界が広がっていく。その喜びといったら、人生の歓びを感じました。だからその映画から文学へ移る時のその培養が、私の青春時代だった。だけどそれから戦争が続いて、今も馬鹿な

ことをしていますが、その時に我々の友達が全部死んでいった。それが私は生き残った。生き残ったということは、単に僥倖とかそういうことではなしに、ある運命的なものを感じましたね。ですからそれは、現代詩なら現代詩をやって、現代詩というフィクションかどうか、人間の真実というのは何であるかということを毎晩問うてくるのですよ。…活動弁士のことばかり話すようになってごめんなさい。これでやめます。（拍手）

鈴木比佐雄　鳴海さんも戦前フランス映画が好きで、フランス映画の題名にちなんだ詩集も作ったようですが、戦争中に焼けてしまったということもあります。そういう意味では、鳴海さんの世代にとってフランス映画の影響というのはものすごかったということだと思います。また鳴海さんのひとつの特徴として、お父さんが「活弁」であったということもあって、その「語り」というのが江戸時代から通じるような、何かそういうようなところもあるし、あとは映画青年であっとこととか、または自分で脚本を書いたりということもあった熱烈な映画青年だった。鳴海さんは「列島」の時代には労働者詩人と見られていたのですが、初めの原点はそういうフランス映画とかフランス文学とか、そういうところを相当ふんだんに身に着けていた、また江戸時代から受け継いだ語りの文化も身に着けていた。そういうところが鳴海さんの下地になったのではないかと思います。

次に、『ナホトカ集結地にて』の誕生前後のことを一番よく知っているのは遠山さんではないかと思うのですが、千葉の詩人の集まりの中で、お二人でいろいろなことをやられた。『ナホトカ集結地にて』が出たのが一九七七年、『定本』が一九八〇年です。実はシベリヤの詩集というと石原吉郎が有名なのですが、読み比べると、ほんとうは鳴海さんの方が優れているのではないかということをずっと考えていたのです。今度の『全詩集』を読んでいただければ、そういうことが実証できるのではないかと思うのです。その辺のことも含めて、ちょっと遠山さんに語っていただきたいと思います。

浜田知章　ちょっとひとこと。今度の無茶な戦争の前で、フランスの外務大臣が反対しているでしょう？　あれはフランスの伝統ですよ。文学や芸術がものすごい歴史を持っていることこそ、その国は文化的なのですよ。だから僕は、フランスに対して敬意を感じますね。もうアメリカなんかだめですよ、人を殺すことに…。ルネ・クレールが監督した『自由を我らに』という映画があったでしょう？　僕はジュリアン・デュヴィヴィエの映画を全部見てますよ。それほどフランス映画が好きでした。（拍手）

遠山信男　鳴海さんと知り合ったのは、当時の千葉県現代詩人会会長が城侑でした頃でした。その時には石井藤雄さんとか斎藤正敏さんなどもいて、斎藤さんの「光芒」の関係で鳴海さんと知り合いました。その後は親しくさせてもらい、詩集『裏声であいさつ』の中に私もちょっと出ているのですが、三十何年間勤めた会社を首になるのです。そこをちょっと読んでみます。

（略）
銀行の　手形の　などなど説明して
首切られるのは　社長とうなだれる
よしゃぁ　五十歳にして首切られてやる
しかし　一人で我慢しておけ　みてくされ
餓えて死んでも　おれはタイである
タマシイがポコポコと波立ってくる
じっと我慢して　ススけ天井をニラんだ
おれ　男である

遠山信男が来て　失業を祝って呑んだ
前後不覚とは　まったく前後不覚である
不覚とは　覚えずと
下からチョンとハネ上がって読む
道路の上に長々と伸びていたら
カミさんがベタベタと　おれを叩いた
しっかりしンさい　しっかりしンさい
泣きながら　叩きつづけていたのを

覚えている
つれ添って十何年　おれ初めてなぐられ
うんうんと泣いた　（略）
　　（「失業」）

こういうふうな詩があります。鳴海の家に一升瓶下げてお祝いに行ったのですけれど、非常に膨大な本が所狭しと家の中に積んでありました。私は大正十年、一九二一年生まれ。鳴海さんは一九二三年生まれです。二つ違うのですかね。それで、鳴海さんは一九四二年に「日本詩壇」の同人というふうに年譜に見えます。その当時、福田律郎も同人ということになっていますが、私は一九四一年に「日本詩壇」に詩を応募して、佳作入選しました。鳴海さんの詩より一年前にです。それでその後すぐに招集になったわけですけれど…。それから三十二年経って、福田律郎の没後十周年偲ぶ会をやろうということになったわけです。それを言い出したのが、鳴海英吉です。「千葉詩人会議」を一番最初に土田明子さんがやっていたらしいのですが、ほとんど途中で投げ出したような形で無活動状態だったものですからね。それで、この福田律郎を偲ぶ十周年パーティを記念としてほとんどもう創立したようなものですが、「千葉詩人会議」を立てたわけです。その時に妙泉閣の近くで福田律郎を偲ぶ会が開かれて、秋谷豊さんも来てくれました。その時のことは「詩人会議」の機関誌に載っております。そういうことがあって、それからその後鳴海さんとは親交を深めていったわけです。

それで、七五年に『風呂場で浪曲を……』というのが発行されまして、その書評を千葉日報と『光芒』に書きました。千葉詩人会議はアンソロジーを毎年出しました。鳴海さんの「鶴」、それから「砂」、「土」が「千葉詩人会議」の機関誌にその時載っております。この三篇は、詩集の中でも注目されている素晴らしい詩なのです。先ほど暗唱で「ふさ子」を朗読したのは武力也ですが、武さんは「千葉詩人会議」の運営委員長、会長ということになっております。それでそういう点では千葉詩人会議も少しは鳴海英吉のために役割を果たしたと思っております。

それで、鳴海英吉の『ナホトカ集結地にて』を読み直してみますと、死のイメージに関わる単語（ボキャブラリー）が非常に多いですね。皆さんもお気づきと思いますが、百五篇中、七十五篇に死の単語が使われていて、その単語の総数は二百六十五個あるのです。一篇の作品中に死の単語が五個以上のものが十四篇。そして一篇中に死に関わる単語が一番多いものが十四篇。そして一篇の作品の中に一番単語が多いのが十一個もちりばめられている。「ちりばめられている」というのはちょっとおかしいのですが、そういうものが揺るぎなくされておる、使われているわけです。それは「狩」という詩です。

こうした事実はやはり異常ですね。こうしたことは、極寒地シベリヤ抑留地にあっての死が、もう日常化されている。ちょっと叩かれて転ぶと死んでしまうということが、この「ナホトカ集結地」の中にも出てきますね。それで死が日常化されている酷烈な現実の反映であることは、確かであろうと思います。それにしても…という想いが強いわけですが、ちなみに、「シベリヤ抑留体験の詩の、いわば先蹤的価値を持つもの」と、かつて安西均さんが指摘するところの長尾辰夫の『シベリヤ詩集』、これは私は渋谷・道玄坂の有名な中村屋（中村書店）という古本屋で探したのですが、「時間」の北川冬彦先生が跋文を書いております。やはり、壺井繁治もそうですが当時の非常に優れた人たちが読後感を述べておりますが、非常に素晴らしい詩集です。その当時の北川冬彦が鳴海英吉の『風呂場で浪曲』を読んだら、非常に感激しただろうと思いますね。それと石原吉郎の『サンチョ・パンサの帰郷』ともう一つの詩集『いちまいの上衣のうた』のシベリヤをモチーフにした同じものがありますね。それらを比較してみますと要するに、鳴海詩集においては死の単語は二百六十五個使われています。長尾辰夫の場合には二十個、それから石原吉郎の場合には、条件は違いますが、八十四篇中に二十九個使われていて、条件がかなり近い長尾辰夫の詩集と比較しますと、鳴海さんの死の単語の頻用度は十三倍多いのです。これはどういうことを意味しているのかと思うわけですが、その死のイメージに絶えず突き動かされながら膨大な詩篇を残していったわけです。鳴海英吉においての死の意味とは何か、これは鳴海英吉の詩の世界を考える場合のキーワードになるはずであると私は思います。つまり、鳴海においての死の凝視は、一生かけての憤怒の持続の形での思惟の投射という内面

境位を持つほかないのであったと思います。そこで際限もなく自然死ならぬ不条理な死、鳴海が「事故死」という死を生産する戦争という政治力学に関わる無慈悲、残酷、悲惨について、それを告発し、記録し、詩の力たらしめようとしたところに、鳴海英吉の真骨頂があったと思います。したがってこうして見ますと、鳴海英吉は現代日本詩史上においての紛れもない「反戦詩人」として明記されるべき詩人ではないだろうかと、私は思うわけです。

それで、鳴海が亡くなってから日本現代詩人会に追悼文を書いてくれといわれまして、書いたものが載っていますので、それを読んで終わります。

《「反戦の骨格を持つ鳴海英吉の死を悼む」

鳴海英吉が不帰の人になった。九月二日のお通夜の晩、「鮫」の大河原巌と一緒に見納めに棺の中の鳴海の死に顔を見たが、まことに凄まじい顔相なのであった。「死んでたまるか！」との心魂の裂帛をさえ感じさせる烈しいものに直面した思いであった。五月初旬からの肺癌による入院・闘病の甲斐なく、八月三十一日午前十一時に七十七歳の生涯を閉じたのであるが、鳴海の詩への本願からすれば、まだまだ書きつがなくてはならないマグマを内にたぎらせている途上での病魔に襲われた無念さが、烈しい死の顔相になる他なかったことなのであろう。私が元気な鳴海を目の当たりにした最後は昨年十一月七日の「千葉県詩人クラブ」秋の文芸講演会、新川和江氏を迎えての時であった。鳴海はその時の十分間スピーチで、戦後間もなくの画期的な詩運動の起点になった「純粋詩」の福田律郎について、その当時の模様を鳴海からしか聞けない逸話をまじえて熱っぽく語ったのであった。新川さんもまたその講演の中で、鳴海の語る逸話にふれながら鳴海を激励する趣があったことが今改めて思い出されもするのである。こうして鳴海は逝ってしまったが、鳴海英吉は反戦の骨格をもつ凄みのある詩人であったと思う。》

こういうものを書かせていただきました。終わります。（拍手）

鈴木比佐雄　どうもありがとうございました。

次は石村さんですが、実は鳴海さんは本名で仏教史の研究をされていて、日蓮宗不受不施派の優れた研究者でありました。千葉の下総・上総を足で歩いて素晴らしい本を書かれたのです。そういう側面を私はある時講演会に呼ばれて聞いて知って驚いたのですが、そういう面をいちばんよく知っていたのは石村さんで、石村さん自身もそういった仏教研究に携わっているということなので、そういうような側面からちょっと語っていただきたいと思っております。

石村柳三　石村と申します。よろしくお願いします。鳴海さんの『全詩集』が出たわけですが、多分読んだ方はお分かりだと思いますけど、戦争を反対、悲惨なものを書いておりますが、もう一つは念仏とかロザリオとか、非常に宗教的なものを書いております。それもそのはずで、エッセイを読むと「私はひとりの仏教徒だ」ということを断言しておりますので、そういうものがあったと思います。そういう一つの土台となるものがシベリヤ体験もあったかも知れませんが、鳴海さんのこの日蓮宗不受不施派の研究、またキリシタンの研究などを通して、大衆の庶民の信仰というものを通しながらその信仰の中にもつ自由、その信仰を通して広がっていく自由の心、自由の心になればこそまたシベリヤで生きられたと思います。それは、先ほど宗左近先生も言ったとおり「神」という詩の中に《今日もシベリヤでは／生まれてくるものに出会えなかった／無明の修羅に　おれは合掌している》—「合掌」という言葉が非常によく出てくるのですよ。合掌とは祈りの言葉なのであって、それがまた『ナホトカ集結地にて』の中に「砂」という詩がございますが、この詩の中にやはり合掌のことが出てきます。それから「星」にもやはり、バタバタと死んでいくシベリヤの生活は、不条理であり無明の世界であったと思います。そういう中にあって、「生きていると思うな」つまり「生きているのだ」という観念というものもなくなって、「生かされているのだ」と。これはやはり仏や神の境地、そして「生かされている」そこから鳴海さんの詩は非常にヒューマニティを帯びてきているということなのです。これを見落としてはいけないと思います。

そこで、日蓮宗不受不施派の研究者としての鳴海さんについて語っていきたいと思います。鳴海さんのあれを読むと、鈴木比佐雄さんの解説を読んでも分かるように、お父さんが墓誌の研究をやっていて、日蓮宗のそういうものに興味を持っていたということと、もう一つは、六〇年安保の戦争反対で鳴海さんも安保闘争に参加したそうですが、その挫折を経て、そこにいろいろ考えることがあったのでしょう、詩を一時中断して日蓮宗不受不施派の研究として変えていったということです。

僕らの「光芒」の仲間として、不受不施に関して名前は知っていても、やっていたということは知っていても、鳴海さんがどういう存在だったかというと、よく分かりませんでした。しかし鳴海さんの一書、または論文等を読むと、たいへんな研究者であったということです。研究する者にとって、「研究者」とは最高のほめ言葉です。彼は昭和三十何年か六〇年安保が終わった後に、立正大学を訪ねています。年譜を読めば分かるとおり、鳴海さんは学歴があまり無かったもので、歴史的な基礎というものはあまり無かったそうです。これは本人が言っているので間違いないだろうと思います。そこで評価されたのか、僕は多分誰かに紹介されたと思うのですが、不受不施の大家であった立正大学の宮崎英修博士を訪ねて行く。そしてそこで不受不施の本格的な研究を始めていく。僕も立正大学に

学んだ一人ですが、立正大学の日蓮教学研究所の所員、スタッフになっているわけで、これになるというのは大変なことなのです。大学院の博士課程を出て若い人が論文を発表してもなかなかなれない。それが、鳴海さんが死ぬまで研究所のスタッフとして携わっていたということを聞いて、僕もびっくりしました。鈴木比佐雄さんから不受不施に関して何か書いてくれということで、今度「COAL SACK」四十五号に三十枚ほど書きましたが、それを調べるのに、やはり研究所のスタッフなら立正大学を訪ねなければいけないと思って、研究所を訪ねて行ったわけです。その時、若い大学の研究所員は「鳴海英吉」とは知らないのです。それはそうでしょう、本名の加川治良で研究をやっていたわけです。そのへんは偉いと思いますね、詩人の名前を使わずに研究をほとんど本名でやっております。二つに分けていたわけです。ところが二つに分けても、やはりそういう精神というものは詩にも出てくるわけですし、論文なども相当書いているわけですよ。例えば「大崎学報」とか「日蓮研究所紀要」とか専門の雑誌、あと「成田史談」とかそういう地方誌にもけっこう書いております。

僕は先ほど鳴海英吉の写真アルバムを見てびっくりしたのですが、昭和三十七年か三十九年の日蓮教学発表大会で若かりし頃の鳴海さんが写真に写っていたのです。当時の大変な学者の久保田正文博士とか、坂本幸雄という岩波の法華経の訳者、東大で若きインド哲学の天才といわれた木村泰賢博士に師事した坂本博士などそうそうたるメンバーで、僕は日蓮教学を多少囓ったもので、びっくりするようなメンバーと一緒に写っているわけなのですが、宮崎英修ももちろん写っておりました。そういう関係で、そういう方面でも大変なものを持っていたのだということが分かりました。

それで、立正大学のスタッフは「鳴海英吉詩人」というのは知らない。だけど私は詩集を持って行って「こういう方なんですよ。詩も書いていたのです」と言ったら、「ああそうなんですか。研究所でも早速その詩集を一冊買います」と言っていました。鳴海さんが亡くなったということは、奥様のす゛ゑ様から研究所の方に連絡があったということで、知っておりました。それで、若い藤森大乗研究員は鳴海さんには会ったことがないと言うのですが、やはり鳴海さんは日蓮教学の方面ではたいへんな研究者らしく、「加川治良先生ですか？」と、「先生」と呼ばれました。それも驚きました。いろいろ調べてみると、けっこう良い論文を書いているのです。それをほとんど詩人の連中は知らなかったということは、そのへんは鳴海さんの偉いところでしょうね。自己宣伝をやらなかったということはね。今度初めてそういうことが分かったのですが…。

そういうものを通しながら、では日蓮宗不受不施とはいったい何なのか、ということになりますが、ほとんどの方はよく分からないのではないかと思います。「不受不施」というのは為政者、権力者など権力をとるものが未信の者、要するにその宗派を信じてない人が権力を取って、そして力を誇示するために他の宗派を抑えようとすれば、当然抵抗が起きるわけです。それを豊臣秀吉が大仏供養ということでやったわけなのです。その時に各宗派に命令をかけて、権力で「集まれ」ということで。ところが、日蓮宗の中では昔から「不受不施」というものがありまして、為政者であろうとも信仰してない者から供養を受けるなと。「不受」というのは、そういう意味で為政者から供養を受けるな、未信の者・信じてない者から受けるな。また「不施」というのは信徒の場合を指しているのですが、要するに他宗の権力を持っている人に布施をするな。要するに、未信の者であれば布施をしてはいけないと。これはなにも日蓮だけではなくて、道元であろうと、親鸞であろうと、一遍であろうと、皆各自がひとつの教えとしてそういうものを持っていたわけなのです。だからこれは当然、日蓮とすれば法華経を広める意味でのひとつの信念であったろうと思います。そういうことから、近世の初頭に日蓮宗の不受不施の思想の仏性院日奥という人が出て、豊臣秀吉を批判して諫状を出すわけです。そうすると、権力者だから「何だ、生意気だ」ということで、日奥という人は結局お寺を自ら退いて、遍歴していくわけです。そういうことがいろいろありまして、日蓮宗の中に日奥の影響を受けた不受不施を説くようなお坊さん達がいっぱい出てきたわけです。日蓮宗の中でも「不受不施派」というのと「受不施派」というのと二つあります。「受不施派」とういのは、為政者であろうと権力者であるならば供養を受けてそれに従えというか、ある意味では非常に寛容的考えを持った思想なのだろうけれど。そうして日奥のそういうものが、例えば池上本門寺の当時の住職であった日樹とか、いろんな人たちに影響を与えていく。それで徳川家康が日奥の不受不施派と受不施派の対立をさせて、不受不施派を邪義だとしていく。有名なのが「身池対論」といって、池上本門寺と身延の久遠寺の対立があるわけです。身延は受不施

派で、為政者の供養寄与というか身延山九遠寺派。池上本門寺は、不受不施の断固自分の理念の信仰を通せという派です。同じ日蓮宗で対立したわけなのです。ところが池上本門寺は江戸城のすぐ外にあるわけですから、江戸幕府も安穏としていられないわけですよ。そこで家康は対論させて、最初から不受不施派は邪義だということを決めつけて、そこから不受不施派の人は大弾圧を被っていくわけです。簡単な例を挙げると、権力者の徳川家康というのは頭が良いのでしょうね、やはり抑えなければ天下を取れないし、平定していくためには宗教政策をやらなければだめなのですよ。だから寺社奉行とかそういうものを置いて非常に権力を与えていたわけですが、そういう政策をとったということは、やはり家康は偉いと思います。そういうことで、弾圧された人たちは地下に潜って、秘密結社として不受不施の信仰を二百五十年、明治八、九年に釈日正という人が出て、明治政府から許されるまで弾圧をくらった。これはキリシタンと同じで、キリシタンと不受不施は邪宗である、江戸市民の敵だということを庶民まで言ったというから、相当に恨まれていたと思う。それでさんざんな非常に弾圧を被っている。首切られたり、はりつけに遭ったり、子供とか容赦なく弾圧されているわけです。それが不受不施派のそういう中にあって彼らは信仰というものを保ちながら、自由の心をもってひとつの大衆の自由性をそこに見出して生き延びて来た。

こういうものが非常に、鳴海のシベリヤ体験を通しながら、自由とは、また戦争反対とか、そういうものに対するひとつの大衆の語り部として持っていたのではないかと思います。芳賀先生が確か栞の中で「そういう民衆の権力に対しては抵抗力を鳴海さんは常に持っていた」ということを言ったけど、そのへんから知ったのではないかと思います。

まだまだ話すことはいっぱいありますが、このへんで。どういう弾圧をされ、どういうふうになったかということは四十五号に細かく具体的に書いておりますので。それで宮崎英修という人は、日本の宗教史に金字塔をうち立てた大学者です。不受不施に関しては大変な人です。

鈴木比佐雄　鳴海さんはよく「戦後詩は民主主義だ」ということを言っていたのです。その民主主義はアメリカから与えられた民主主義ではなくて、自分がシベリヤで民主化闘争をやったということと、あとはやはり日本の民衆の中にも根源的な自由を追求した人間たちが居た、不屈の魂を持った人間が居たのだという確信を持っていたのですよね。それで鳴海さんという人間もそうですが、他者に対し男女差・年齢を問わずひとりの人間として接してましたね。そういう人格を持った方だったので。そういう方が「戦後詩は民主主義だ」と言ったことを、私はよく思い浮かべます。そのひとつの裏付けとして、日蓮宗不受不施派の研究があったのではないかなと思うのですが…。

次に、岸本マチ子さんにお話を伺います。生前鳴海さんと私がいろんな詩人の話をしたのですが、詩誌「鮫」の中で岸本マチ子さんの評価はかなり高くて、何か近いものを感じていたのではないかと思います。「鮫」における鳴海さんのことや、鳴海さんが晩年歴史をテーマにした叙事詩を追求したことなどを語っていただければと思います。

岸本マチ子　沖縄からまいりました岸本マチ子でございます。よろしくお願いします。

私が鳴海さんにお近づきになりましたということが、たいへん不思議なのですけれども、全く接点がなかったのに突然ある日鳴海さんが現れた…というような感じなのです。それは、ある出版記念会の時に「マッちゃん、マッちゃん」と後ろの方で呼ぶ人がいるのです。「えっ、私のことをマッちゃんと呼ぶ人って誰だろう？」と思って振り返ってみましたら、見たこともない、ちょっとがに股で（笑い）蓬髪で…。「えっ、誰だろう？」と思って、私があまりマジマジと眺めたのでしょうか、「俺だって詩を書いてるんだぜ」などと言われてしまいましてね、「ああ、あの…お名前…」と言ったら「俺、俺はこういうものだよ」などと簡単におっしゃったのですが、何かよく分からないのです。それで、初対面なのにとっても親しげに、そして笑顔がとっても可愛いのです。ああ、こんなに笑顔の可愛い人ってきっといい人なんだろうな、と思いまして、その出版記念会の時に隣りにペッタリ座りまして、そしてずっとお話をお伺いしたのですが…。二次会も一緒になりまして、そしてもうそろそろ家へ帰ろうかなと思いましたら、「三次会も行こうよ、行こうよ！」と言うのです。それで「いや鳴海さん、お家に早く帰らないと奥さんに叱られるから、お帰りになった方がいいですよ」などと言いましたら、「いや大丈夫だ。ウチは母ちゃんはとってもいい人だから」なんて、（笑い）奥さん自慢をその時とうとうと打たれまして、「大丈夫だ、大丈夫だ」ということで。でも、駅へ連れて行って、そっと隠れて帰って来ちゃったのです。

そういうことがあって、私は鳴海さんにとても悪いことをしたなという慚愧の念があるのです。あの時に、何で私は鳴海さんともっと親しくお話ししなかったのだろう？　ほんとうに絶好のチャンスを、私は自分の無知によって逃がしてしまったというような気がするのです。あの時鳴海さんは、いろいろお話がしたかったのではないかという気がするのです。なぜならば、あとでお手紙をいただいた時に、私の詩と鳴海さんの詩がどこか似ているのだ、その底流のところで響きあうものがあるということを鳴海さんがおっしゃってくださって、とっても嬉しかったのです。ああ、そういう気持ちで鳴海さんがいらっしゃってくださったのに、私は早く追い返して千葉行きの電車に乗せてしまった（笑い）などというようなことで、とっても残念に思いました。あとでお聞きしたら、何と宗教の研究者であり、大詩人だったということで、ほんとうに何て私は馬鹿なんだろうと思いました。

そして今日、ここにお詫びの意味を込めて出席したわけなのです。今日出席してお話を伺っていましたら、やはり類は類を呼ぶというのでしょうか、遠山先生の生前の鳴海さんを非常に彷彿とするようなお話を伺って、私はとても嬉しかったのですが、ほんとうにそんな感じで「マッちゃん、マッちゃん」と、今でも耳のここに呼びかけが本当に聞こえてくるような感じなのですが…。

その鳴海さんの流刑地シベリヤの話を、その当時私は全く知りませんでした。びっくりしてしまったのです。実は私の叔父も同じようにシベリヤに行っておりまして、彼も下士官で一番最後まで残された口なのですが、生きて帰ってまいりました。そういうシベリヤに行った体験のほんとうに辛いお話がこの『全詩集』の中にありまして、びっくりしてしまったのです。ああすごい、これは全く私の叔父と同じようなあれを辿っていらしたのだなということで、ほんとうにますます私は生前もっともっと鳴海さんとお話ししたかったと、今さらながらそう思うのです。でも、何度かお会いした時に鳴海さんがおっしゃった言葉の一つひとつを、今じっくり噛みしめて思い出しているのです。

「マッちゃん、宗教というのはね、民主主義なんだよ」

これは、私にとっても解りやすく噛み砕いて話してくださったのだと思います。びっくりしました。「宗教の中でも仏教が一番民主主義なんだよ」「えっ、仏教って民主主義なんですか？」「そうだよ。仏教くらい平等で、自由で、しかも南無阿弥陀仏と唱えたら悪人もまた昇天できるという、こんな素晴らしい宗教があるかい？」—そう教えてくださったのです。「ああ…私も仏教徒です。私の家は浄土真宗なのです」「そうかい、良かったねえ」。喜んでくださいました。そして、仏教を「民主主義」という言葉で表現された鳴海さんを、素晴らしいと思いました。これは一番分かりやすい仏教の説明ではないかと思います。

そういう意味で私は今ほんとうに、鳴海さんが亡くなられて、もっともっと好きになっています。あのバックの写真の何と素敵なことでしょう。生前よりもずっとハンサムです。もっと若い時は「俺は若い時はハンサムだったんだぜ」なんて平気で私に言っていましたけれども、その内容をあとでお聞きしましたら、何と演劇青年だったということで、なるほど彼は一度は演劇を目指したのだということがよく分かりました。それで、私が『卑弥呼』を書いた時、「ああ、俺もこういう叙事詩を書こう！　待ってろ、俺も書くからな！」などと、そういうハガキをくださいました。それを私はとっても楽しみにしていたのですが、いつの間にかアルコールが全身にまわって、何か思ったよりも早く旅立ってしまわれて、ほんとうに残念だと思います。

私は、ここで彼のご冥福を祈って詩を朗読しようかなと思って準備してきたのですが、今日末原さんと力也さんお二方の素晴らしい詩の朗読をお聞きして、とっても恥ずかしくて、やはり彼の、鳴海さんの詩は男の声であんなふうに力強く読まれなければだめだなと思いましたので、それはやめておこうと思います。でも鳴海さんの詩というのは、眼で読むよりも耳で聞く方がより胸に響いて来る、そういう詩ではないかと思っております。どうも失礼いたしました。（拍手）

鈴木比佐雄　ありがとうございました。

次は本多寿さんです。実は私は、『鳴海英吉全詩集』の前に浜田知章さんの全詩集も編集委員の一人として作ったのですが、その全詩集を作るという仕事のイメージというか、そういうことをするということを学んだのは、本多さんの本づくりなのです。私は宮崎の詩人を八〇年代後半から注目し始めて、その詩人たちと親しくなって、その詩人たちの詩集とか全詩集を読ませていただいて、その本を作った本多さんの本づくりというのにすごく多くを学んだのです。年譜を作成して、そして解説を書いたりという優れた詩人を後世に残すということを、本多さんの本づくりから多くを学んだのです。ですから今回も、いろいろ編集委員の方たちと話した時に、もう本多さんにやってもらうしかないのではないかということで、それでもう決めてしまって、あとからお願いしました。全詩集を作る時も、実は予算の関係で手づくり詩集の一部をちょっと省こうかなと思ったのですが、本多さんは「予算のことはいい。全部載っけた方がいい」と、お金がたくさんかかるのに、逆に我々にそういうことまで言ってくれたということで、普通の出版社ではあり得ない出版社で（笑い）ありがたかったのですが。そういうこともあって、今度のシンポジウムには参加していただいたわけです。あとは鳴海さんは「ナホトカ」の詩人であるのですが、「COAL　SACK」には『ナホトカ集結地にて』以後のロシアの民衆との交流を書い

た『サカロフスカ国立農場』という五十数編の手作り詩集があったのですが、なぜかきちんとした詩集にしなかったのです。それは謎なのですが、そういうことも含めて、ちょっと本多さんに語っていただきたいと思っています。

本多寿　本多と申します。よろしくお願いします。

僕は最初に鈴木さんからシンポジウムのお話を聞いて、レジュメを見た時に非常に緊張したのですが、ずっと聞いていると、皆さん非常にラフにやっておられる。僕のところだけ『サカロフスカ』、何か非常に重圧がかかっているような気がするのですが…。（笑い）

その前に、鳴海さんとの出会いをやはり語っておかなくてはいけないと思います。僕は非常に縁が薄くて、私の兄貴がやはり詩を書いておりまして、浜田知章さんに兄の偲ぶ会で講演をお願いして語っていただいたあとに、浜田さんがやっておられる「ダベル会」という非常にラフな詩の勉強会といいますか、新宿西口の非常に昔ながらの飲み屋さんの二階の座敷で兄のことをまた東京でも語ってくれるということで、どういうふうに語られるのかちょっと聞いてみたいということがありまして聞いたのですが、利通のことは話さなくて、反戦の詩を書いている詩人、浜田さんの十八番と言っても良いのではないでしょうか、反戦詩人—だから戦争協力詩を書いた詩人たちへの厳しい詩談といいますか、そういう話でした。僕は戦後生まれですが、仕事柄『愛国詩集』とかいうのを現物を見たことがあるのですけど、僕などがやはり影響を受けた詩人たちがかなりの数入っているわけです。具体的に名前を挙げるのも多すぎて困るぐらい関わっております。その時僕は、浜田さんにちょっと盾突いたのです。例えばその『愛国詩集』一冊に限って言うと、「それに関わって戦争協力詩といわれるものを書いた者が同列には論じられないのではないか」という話をしたのです。それは例えば、戦争協力詩を積極的に書いた人、脅されて書いた人、怖くて書かなくて隠れた人—最初に『愛国詩集』などというのを読んだ時に、それぞれのレベルが違うのではないかという印象が僕の中にあったのです。『愛国詩集』一冊を丸ごと「戦争協力詩」で片付けて良いのだろうかという疑問がありました。そういうことがあって浜田さんにそういう意見を述べたら、鳴海さんがどこからともなくあの例のジャンバー姿でスッと現れて僕の前に座って、にっと笑って盃を出して酒をついでくれたのです。それが出会いでした。

そのあと二度くらいお会いしているのですが、細かいことは抜きにしまして、鳴海さんの実際の詩はあまり知りませんでした。「COAL SACK」に発表される詩と、この仕事をさせていただくことになって、全詩集の作製作業の中で鳴海さんに出会っていきました。今も出会い続けているのですが…。

先ほど宗先生がユーモア、戯画化、客観化、苦いユーモアと言われましたが、取り上げられた「北」という詩の《おれのなかのおれ》という言い方、それから「零（ぜろ）」の中の《ぜろが立ち上ってくる》という第一行目、それから不受不施派のお話とか仏様の話とかが出ましたが、《おれのなかのおれ》というのが、鳴海さんの中では仏様と何か同等ではなかったかなと思います。零が立ち上がってくるところにもやはり仏様が立ち上がってくるような、何かそういう…お話を伺いながら聞きました。

それと、一番僕が好きな詩は、「鶴」という詩が『ナホトカ集結地にて』にあるのですが、これはいろいろリアルな表現がたくさんある詩の中でそんなにリアルな詩ではないのですが、何か非常に寂しい。シベリヤに抑留されていて、頭上を南下したり北上したりする鶴を見ながら、望郷の念、帰れないという想い、いろんな複雑な想いが錯綜したと思うのですが、この詩が、作業していく時に僕の中で非常に印象に残っていたのです。そしてこの仕事が終わって、去年八月三十一日の一回忌にお墓参りに行きました。その頃にふっと「鶴」のことをまた思い出して、書いた詩があります。鳴海さんの呼びかけに応えて書いた詩です。これは『馬車』の最新号に発表しているのですが、「聖火」。初めてそういうことを打ち明けますが、鳴海さんに捧げるつもりで書いた詩です。読んでみます。

聖火

雪原に舞い降りた
一羽の鶴の頭のてっぺんに
小さな火が燃えている
何千年もむかしから受け継がれ
頭頂から頭頂へ点火されてきた火だ

空を渡るときも　羽を休めるときも　あるいは
餌を啄むときも　おのれの頭上に
絶やさず燃やし続ける
一点の火

しかしこの火は
いちどだって草叢を燃やさず
いちどだって人の棲む街を焼いたことはない
いちどだって　おのれの骸さえ燃やしたことはない
しかしこの火は　頭頂に燃えつづけている

こういう短いものですが、「鶴」という鳴海さんの詩が何かクリックしてきまして、生まれた詩なのです。

それで「サカロフスカ国立農場にて」という詩篇なのですが、これはもちろん「ナホトカ集結地にて」と地続きのものといいますか、姉妹編といいますか、そういうものですが、こちらの方がやはり諧謔性がさらに磨きがかかっているような印象を全体的には受けます。

鈴木比佐雄　鳴海さんが追求した詩のテーマ、詩のことは、やはり本当のリアリズム、真のリアリズムということを追求したのだと思うのです。それは戦後詩の大きな課題であったと思うのです。「荒地」も多少やったかも知れませんが、「列島」の多くの詩人たちがそういうことを目指したのです。鳴海さんは、その真のリアリズムを実現していくその方法というのが誰も気がつかないことをいろいろ実験したのだと思うのです。そういう意味で、鳴海さんには様々な面がある。私は七つのテーマがあったと思っています。一つはシベリヤ抑留、二つ目は中国戦線の、中国の民衆の悲劇や日本の兵士の悲劇を書いたもの、それから戦後に板金工などをした労働者の現場を書いた詩、遍路というか中世の宗教を生み出したような、そういうような宗教を求めざるを得ない民衆の苦しみみたいなもの、あとは自分の身近な生活の哀感をちょっとソネット形式で書いたような詩文、「ふさ子」のことなどを書いた反戦詩、晩年に「幕末」とか「広島」とか、「R・A・A」という特殊慰安施設協会というようなものを書いた叙事詩。

鳴海さんほど自由に生きた人間というのはいないのではないかと思うくらい経歴を見ると多彩でまた非常に悲惨な経験をしているのですが、そこでも不屈な魂でもって、バネでもって生き還っていくのですよね。そこが石原吉郎と違うのです。石原吉郎は、どうしてもニヒリズムの方向に行ってしまって最後は自殺のようになってしまう。でも鳴海さんは、鳴海さんほどの苦労をしたら自殺してもいいような感じなのですが、そうじゃない。その逆境の中から立ち上がってくる、そういうような詩人であったということなのです。そういう詩人がこれほどまでに書いた全詩集は、後世の人が読めば必ずいろいろなヒントがあるし、自分の血肉になるのではないかと思うのです。そういう詩人と関わりを持ったという我々は幸せであったのではないかなと思って、皆さんにも感謝したいし、私も「ありがとう」と正直に今この場で言いたいと思っています。

今日のシンポジウムは別にまとめようと思っていませんので、皆さんのさまざまな考え方を参考にして、それでもう一度『鳴海英吉全詩集』を繙いていただければと思っております。

岸本マチ子　すみません、ちょっとだけ読ませていただけますか、「へんろみち・海」という詩を。鳴海さんが心をこめて書かれた詩の一篇を読ませていただきます。ご冥福を祈りながら。鳴海さんはとても声が良かったのです。ですから、鳴海さんの朗読もとっても素敵でした。語り口がとてもリズミカルで、良かったと思うのです。そんなふうに読めるかどうか分かりませんが、読ませてください。

へんろみち・海

潮ざいの音や　海の匂いはあったが
急にへんろみちが切れ　海
おれは　砂浜によろめいて　ひざをついた

列車の左右が割れ　突然にナホトカの　海
海と言ったのかも知れない
とっさの叫びが　思わずするどく出た
両腕を高く上げ　砂にのめる
のめり込んだと言う方がいい
ロスケの警備兵が　起きろと銃でつっつく
よろこびとか　かなしみとか
そんなものではない
白く泡立ちつらなる海が　そこにあった
それだけのことだ
波が　あああわ　頭をこえてくだけている
巻き貝やさくら貝が　砂まじりして
倒れているおれたちの　らんいの軍服を洗う
勿論あふれる涙を　かくす仕草ではない
流木の根こぶのようなおれたちの何人かは
ロスケは銃を身体によせ言う“死んでいる”

もう一日　死ぬのを我慢したら帰国（ダモイ）
はうようにしてここまで来た
神も仏もあるのかと言う奴がいた
神も仏も　たっぷりある
ここは炭層の下ではない　鉄道の枕木
伐採の雪なだれの倒木ではない
祖国の岸辺を洗う　ナホトカで死ねた
ここで死んだ奴が　羨ましい

それぐらいにしか　言い切って慰めるほかに
おれたち　なにが言える　なにが出来る
無念だったろう　それはあとの言葉だ
死んだ奴の所持品は
あっと言う間に　分配した

暗うつな　夜の海・空　水平線に
うこん色にひかる
わずかにたわみが暮れ残った
歳月はなにもない　単純な潮ざいのなか
おれは　死んだ戦友を弔うために
へんろみち　歩いていたのではないが
砂浜に座り　満ちてくる海水に腰を浸し
呆けて黙り　吸いつけた煙草
赤いほたる火のように　海にとばしつづけ
なむあみだぶつ

なむあみだぶつ……

司会　皆さま、ご静聴たいへんありがとうございました。もっともっとお聞きしたいような気分になっておりますけれども。また今日はパネラーの皆さま方、たいへんありがとうございました。それぞれの鳴海さんのお話をお伺いできましたし、そして宗さんのお話も併せてお聞きできまして、ほんとうにようございました。皆さんご存じかも知れませんが、宗先生の『詩のささげもの』（うたのささげもの）は新潮社から昨年出たご本ですが、私も今日のために多少なりとも勉強させていただこうと思って拝見しました。これを読みますと、今日の宗先生のお話がほんとうによく分かりますとともに、パネラーの皆さんがお話になったことも併せて、鳴海さんの奥深い所までがなにか分かるような気がしますので、どうぞ皆さん『詩のささげもの』をよろしかったらお求めになってお読みくださいませ。これも鳴海さんの為ですし、宣伝ではございませんがひとこと申し上げさせていただきました。どうもありがとうございました。それでは、閉会の辞を佐藤文夫さんにしていただきたいと思います。

佐藤文夫　今日は足元の悪い中をこんなに多数おいでくださいまして、ありがとうございました。鳴海さんというのはつむじ曲がりでありまして、お葬式の時も大変な天気だったのです。今日は桜が満開でもう花がいっぱいという雰囲気でやるはずだったのですが、こんな天気になってしまいました。これは鳴海さんのつむじ曲がりのせいだろうと思います。

今日のような会がしかもお茶だけで行われるというのも、初めてですね。何か鳴海さんの本を祝う会が「お茶だけ」というのではたいへん寂しいので、本人の意思ではないと思います。二次会は、このすぐ近くの神田っ子という、「アサシシンブン」としか発音できなかった鳴海さんにたいへん相応しいお店がありましたので。会費はお一人三千五百円だそうです。ぜひお越しいただきたいと思います。

それでは、今日はほんとうにこんな天気の悪い中をお集まりくださいまして、ありがとうございました。宗先生、どうもありがとうございました。（拍手）―了